

総合領域編

1 実践例 - 6年 -

2 単元名 役立ち隊意識改革

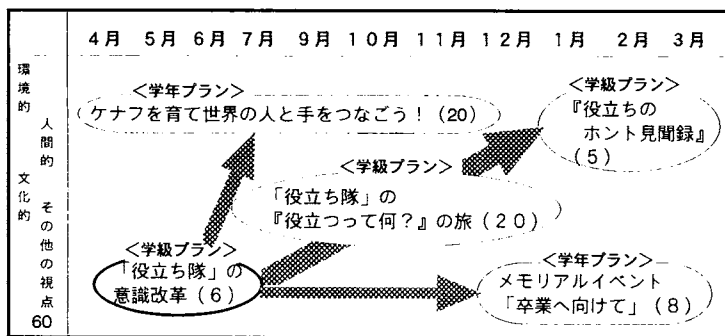
- 3 単元目標 ・体に障害を持っている人や環境保全に取り組む人との交流などを通して、夢を持って生きる尊さを知るとともに、人に役立つことの意義を自分なりに見つめ直し、学級プランの活動計画を立てることができる。

4 指導にあたって

(1) 総合プランについて

本学級プランのテーマは「『役立つ』とはどういうことを考える」ことである。わたしたちは、世界の中で様々な人たちと、また地球上で多くの命と共に生きている。この様な観点に立った「共生」というキーワードは、近年ことに注目され、「共生」に対する意識も高まりを見せている。それに伴って何かに「役立ちたい」という人々の願いも市民を中心に拡大し、無論子どもにもこうした意識は広がりつつあり、「人に役立ちたい」という思いを多くの子どもが抱いている。ただ、「役立つ」ということば自体が、他者を見下したり、おごったりするという意識を含意する場合もあろう。そのような自分自身に気づかず、他者への理解が不十分なままでは、子どもの思いが、本当の意味で社会に貢献し、世界（地球）市民としての資質を培うことにつながるとは言い難いと考えられる。そこで、この単元では、身体に障害のある人々との交流、今までの自分にはない、環境に対する視点に接する活動を通し、子どもがこれまで考えてきた「役立つ」ことの意味を改めて問い直し、再構築する場としたい。この総合学習での活動が、子どもの「他者への想像力」を伸長する嚆矢となることを期待している。したがって、子どもたちは「役立つ」ことの意味を常に問いながら活動内容を判断し、計画していくことになるが、一連の活動を通して、問題解決力、情報活用能力、企画力、コミュニケーション能力、実践力などが向上していくことになろう。また、学級プランの最後では『役立ちのホント見聞録』という形で子どもの思いの変容を表現することを予定している。

6年1組総合学習年間プラン 《学級テーマ》
「役立ち隊」の果てなき旅



主な活動と内容	「個」の確立した姿に迫るために	自己評価のポイント
<p>1 5年時の学習を想起しながら今年の学級プランについて話し合う</p> <p><5年生の時の総合学習で出会った人はだれだったかな?></p> <ul style="list-style-type: none"> ・視覚障害の人だった ・点字の打ち方を習ったよ <今年の学級プランはどんなことをしていきたいかな?> ・人に役立つこと ・環境に役立つこと <p>役立つとはどういうことだろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・困っている人を手助けすること ・自然を美しい状態へと戻すこと <p><体に障害のある人がきたらあなたはどのようにしますか?></p> <ul style="list-style-type: none"> ・お手伝いする ・手をとってお招きする . . . etc. 	①	役立つということに 対しての自分なりの 思いを表現できる (自己達成評価)
<p>2 「役立つ」ということを見直す</p> <p>○「Challenged (チャレンジド)」と交流する (本時)</p> <p><体に障害を持った方と交流しよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・左手一本で粘土をこねるなんて信じられない ・体が不自由でも夢は失わない生き方はすてきな ・自分でボランティアもしているなんてすごいな ・変に気がついたり 手を差し伸べることは役立つことではないこともあるんだ <p>○環境保全に取り組む方と交流する</p> <p><環境保全の大切さを広める人と交流しよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境破壊がとてつもなく深刻ということをよくわかっているんだ ・ゴミを拾うことが環境にやさしいとはかぎらないんだ 	①②③④	交流した人に対して 自分なりの思いを持 ち これからの活動 計画に対する意欲を 表すことができる (自己達成評価)
<p>3 クラスなりのテーマを持ち、交流し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・役立つってもっと周りの人や環境を理解した上でないと独りよがりになることもあるんだな <p><6-1なりの役立つ活動プランを立てよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・福祉グループ . . . 相手の立場をよく考えて○○の活動をしていこう ・環境グループ . . . 環境の事実をよく知った上で自分たちができる○○の活動をしていこう 	①②③	自分の掲げたテーマ と方法について自分 なりに自省できる (自己客観的評価)

12) 単元設定について

単元計画（総時数6時間）

本単元は、前掲の総合プランの導入にあたる部分である。すなわち、子どもたちの総合学習に対する思いや願いを明確にし、年間の学習の見通しを立てるという位置づけの単元である。

まず、子どもたちが今までやってきた総合学習で心に残った活動を出し合いながら、今年一年間の総合学習に対する思いや願いを交流し合うことにする。子どもたちは、昨年度出会った視覚障害の方とのふれあいを思い出し、ボランティア的な何か役立つ活動に意識が向くことが予想される。そこで、今回はその子どもの意識を高めるために、失語症で半身不随という障害を持った方で、陶芸の道を歩み続ける方を学校に招いたり、環境保全に力を注いでいる方との交流から、その方々の夢や思いを感じとるようにしていきたい。また、その方自身のボランティア活動の具体的な事実を知り、人に役立つ活動に対する意義を再認識するとともに、活動に向けての意欲を高め、自分なりにできることを見つけるようにしていきたい。その上で、今年一年間、総合学習で追求していきたい自分なりの役立つ活動のテーマを持つことができるようにし、学級独自の「活動プラン」を立案できるようにしたい。これらの活動を通して、人や環境にやさしい活動の尊さに気づくことや学級独自の活動プラン作成にあたっての企画力、表現力、情報活用能力（発動する力や見通す力）を培っていききたいと考える。

「個」の確立した姿に迫るために

① 一人一人が自発的に「役立つ」活動プランが持てるような場の設定を工夫する

子どもたちが持つ「役立つ」活動に対しての考え方をゆさぶり、彼ら自身が「役立つ」ということの意味を見つめ直すきっかけとして、失語症で半身不随の方との陶芸を通じた交流や、環境ボランティアをしている方との交流の場を設定する。子ども達の考え方とは異なる価値観を2人のゲストの方に話してもらい、子ども達が「役立つ」活動の意義や大切さについての考えを深めるようにしていきたい。この場で得た驚きや感動が、年間の活動を自発的に考え、実践していく上で大きな原動力になると考えている。

② プランの見通しが持てるように 自分の思いや考えの表現を促す

障害を持った方や環境ボランティアの人々との交流を通して抱いた素朴な驚きや感動、ショックを授業ごとにカードに記録し、その思いを素直に全体の場に発言の形で出すように促したりすることで、自分のこれからの「役立つ」活動の方向性に気づくきっかけにしていきたい。

③ 子どもの役立つ活動に対する思いや願いの共有化を図り自分のプランの再構築を図る

子どもの役立つ活動に対する思いや願いは、個々それぞれ違うものとなろう。障害を持った方や環境保全に力を注いでいる方との出会いから生まれた自分なりの役立つ活動に対する思いや願いを自由に交流する場を設けたり、自分たちの活動の計画を交流し合う場を設けることにより、「役立つ」活動そのものを見つめ直し、学級全体の活動計画の立案へとつなげていきたい。

④ 自己評価活動で自分の立案したテーマのよさの自覚を促す

役立つ活動に対する思いは常に授業の終わりにプリントに書き留めたり、各自の思いを載せた座席表を配布し、それらを見つめ直すことで個々の役立つ活動に対する思いや追求していきたいテーマについて自己評価ならびに相互評価へとつなげていきたい。そうすることで、子ども自身が、自分なりに追求していくテーマを明らかにし、それを追求する過程において、自己の高まりに気づき、自覚することへとつながっていくことになると考える。

(3) 本単元における授業の実際と考察

本単元では、真摯に福祉や環境を見つめ、実践しているゲストを招いた。以下、ゲストとの出会いによって、子どもが「役立つ」ということに対する新たな視点を得、これまでのイメージや認識を自ら見つめ直し、再構成する過程を考察する。考察にあたっては、主に、抽出児（A～F児の6名）の自己評価（ふり返りカード）の変容を中心に進めることとする。抽出にあたっては、関心の方向（環境・福祉）、「役立つ」ことに対する意識の程度の2点を考慮した。

A児（女）→福祉に関心	自分の思いをしっかり持つ	B児（男）→環境に関心	論理的な思考に優れる
C児（女）→福祉に関心	正義感が強い	D児（男）→福祉に関心	感覚的に捉える
E児（女）→環境に関心	安易な実践に疑問	F児（男）→環境に関心	実践を重視

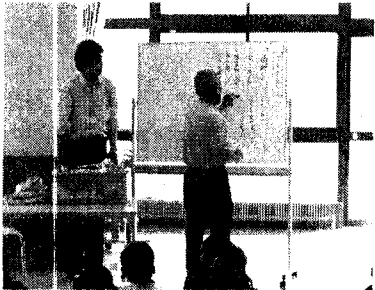
2 「役立つ」ことを見直す

○チャレンジドと交流する

＜荒木田さんに役立つことを考えて、どんなことができたかな＞



- ・荷物を持ってあげた
- ・障害物をどけて誘導した
- ・玄関のドアを開けた
- ・前を通らないようにした
- ・イスを出した
- ・笑顔で話しかけた
- ・元気にあいさつした
- ・みんなでいくと大変だから行っていた



自分たちの行動はどうだったかな？

- ・荒木田さんは、少し困った表情で子どもたちの行動を評価した。大きく◎がついたのは「元気な声であいさつ」「笑顔で話しかける」の2つであり、あとは、子どもたちの気持ちへの配慮もあって小さい○がついた
- ・ドアを開けるのは左手でもできる
- ・自分でできることは自分でしたいからかも…



片手で粘土をこねる

- ・（車を運転している写真を見て）すごい、驚いた
- ・ご飯食べるのも歩くのも大変なのに…
- ・（荒木田さんが粘土をこねるのを見て）速い、機械のよう

②自分の認識を見直す～ゲストとの交流

交流した人に対して自分なりの思いを持ち、これからの活動計画に対する意欲を表すことができる（自己達成評価）

◇障害を乗り越えて活躍する人(チャレンジド)との交流を通して

子どもたちが、荒木田さんに役立つだろう、荒木田さんは喜んでくれるだろうと考えて行ったお出迎え。その行動に対する荒木田さんの評価は子どもたちが思い描いていたものとはおよそ異なるものであった。

脳溢血による右半身不随、失語症という障害を乗り越え、精力的に活動する荒木田さんが「弱者としてみられ、特別扱いされたくない」という強い信念を持った人であるということに子どもたちの想像は及ばなかったのである。

その後、車の運転、陶芸までをこなす荒木田さんに子どもたちは一様に驚きを隠さなかった。左手一本で硬い粘土をこねることがいかに大変かということ、身をもって感じる場も設定した。

その上で、障害を持ち、子どもたちの認識の中では「役立つべき」存在であった荒木田さんが、体の不自由な子どもたちに陶芸を教えるボランティアを続けていることを知らせた。子どもは、「みんなに助けられているお返りで、人の役立つことをして助けたいのでは…」と、ボランティアとしての荒木田さんの思いを想像した。しかし、荒木田さんが返したことは次のようなものであった。

「陶芸をして、子どもたちと一緒に楽しみたい。役立つというのではない」

「10人私のような障害者がいれば、8人はみんなが思っているように役立つことをしてほしいとおもっとる。でも2人は、そんなこと考えていない、何もかもしてもらうのはイヤ」

事後のA～F児の振り返りは次のとおりであった。

A児：自分は相手がうれしがっていると思っていても 荒木田さんのような人にとっては 差別されているように思われたんじゃないかと思った 本当に相手がうれしくないと思う

B児：役立てたつもりでも人によってはそれが迷惑になってしまうことがあることが分かった つまり 役立つためにはその人の意思 状況を考慮しなくてはならない 役立つことは難しい

C児：人にとってはやらしてもらわなくてもいいことがあるし やってほしいということもあるから 今日役立つということにはまだなっていないなと思いました 一言声をかけて 「持ちましょうか？」などと聞けばよかったと思います 人によって受け入れ方が違うと思いました

D児：荒木田さんはできることが多いけど 同じ障害を持つ他の人にもできることは見守って できないことは手伝ってあげる

E児：今まではとにかくいろいろやってあげれば相手にとって「役立つ」ことだと思っていたけれど 荒木田さんのようなすごい人も「体が不自由だから…」ではなくて 普通の人と同じように接することも大切なんだなと思いました

F児：相手のことを考えて その人が「自分がやりにくいことをしてもらってありがとう」と思うことが役立つということだと思います

A児は、自分の「相手がうれしい」という思いに、差別的な意識が無意識のうちに含意されていることに気づいていた。E児も「普通の人と同じように」という表現で、同様のことに気づいていることが分かる。C児は、「まだ役立つことになっていない」と自己客観的に評価していた。B、D、F児においても、「もっと相手のことを知る」必要性を感じていることを表してい

に正確、軽々、きれい

- ・(自分たちも体験して)両手でやってもあんなふうにはできないのに…



荒木田さんから陶芸を学ぶ

- ・後に、できあがった作品は、「荒木田さんにも見てもらいたい」という子どもたちの思いから、一人一人のメッセージとともにビデオレターに収めて、荒木田さんに届けた

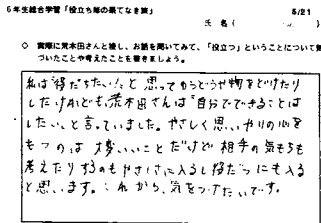
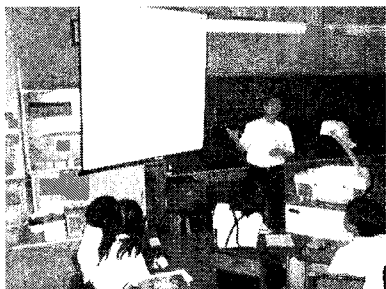


図2 荒木田さんとの交流後のふり返り

○環境保全に取り組む方と交流
 <環境保全の大切さを広める人と交流しよう>



現状のままでは2020年には…

講話の主な内容

- ・南極の氷がどんどん溶けていつている
- ・湖が干上がって取り残されたたくさんの船→人間の意識の低さ
- ・CO₂の増加、オゾン層の破壊
- ・核家族化など家族形態の変化によって、現前となった問題→老人介護、エネルギー問題
- ・原因を見つけ、答えを探し出していくことが大切

た。これらは、荒木田さんとの交流を通して、子どもが、体の不自由な人(相手・他者)の立場から考えることができたことを示しているといえる。しかし、その一方で、「できることはさせて、できないことをしてあげる」というような短絡的かつ自己優越的な表現をしているものが散見されたことに対しては、実践に入る前に、全体に返して考える場を持つ必要性を痛感した。

子どもたちのふり返りには、荒木田さんとの出会いによって、自分たちの認識が弱者に対する先入観に囚われがちだったことに気づき、「役立つ」ということを見直そうとしている姿が表れている。十把一絡げ的な視点から、個々の相手への配慮が大切である点に目を向け始めたことが分かる。

◇環境の達人との交流を通して

子どもの意識改革の第2弾として、環境ボランティアに長年携わっている久保さんを招いた。前述の体の不自由な人に対する認識同様、子どもの環境に対する認識も、「町をきれいに、気持ちよく」という、いわば生活環境の向上という側面が強いものであった。植林、森の手入れなどの意見も出ていたが、それも生活環境の延長線上に位置づけられているものであり、いわゆる地球規模の環境問題との関連性は弱い。したがって、子どもたちが環境面から役立つとする対象(相手)は、自分のごく身近な範囲に限定されていた。

こうした子どもたちの実態から、久保さんには、切迫する地球温暖化問題を軸に、地球環境の現状と思いがけない他者(家族)とのつながりについて話してもらった。A~F児のふり返りは次の通りである。

- A児：久保さんのお話で「家族のきずなと環境はつながっている」とありました。ということは環境と福祉もつながっています。「役立つ」ということは原因を見つけ答えを探していくことだと教えてもらいました。大事なことは心だと思ふ。ヤバイ未来をなんとかよくしたいです。
- B児：自分を見直すところから始まるような気がした。環境問題も福祉の問題も。発端は人だということが分かった。いきなりゴミ拾いではなく家庭の現状などのデータをそろえてからどうすればいいかを考えなくてはいけないと思った。2020年なんてすごく近いなあ。答えが見つかるといいな。
- C児：環境と福祉の原因は同じということ。福祉で家族が一つの部屋に揃って何かをすると環境にもよいことになるのでOK。家族の大切さに気づかないといけない。
- D児：役に立つということは人だけではなく自然などと共通した考えをしないといけないことがわかった。一つ一つの小さな事が大切だ。
- E児：あと20年ぐらいで水や食料がなくなり生物は絶滅すると予想されていることを知ってびっくり。自分が住んでいる地球だからみんなできれいにするのは当たり前。「昔ののどかな環境をもう一度」私はこのことをモットーにいろいろな人に呼びかけていきたいと思ひます。
- F児：今まで環境や福祉を守ることは自然を大切にしていってゴミを拾って体の不自由な人を助けるだけの簡単なことだと思ひていました。自分たちさえよければいいという人もいるので行動することはなかなか難しいことだと分かりました。久保先生の話聞いて「自分たちでちゃんとできるかな」と思ひました。

このように、久保さんの話しから、子どもは、抜き差しならない地球環境の現状と、福祉問題、環境問題両方のカギとなる家族の在り方に目を向けていることが分かる。

B、C児は、実践に際しても外向きな活動だけではなく、まず自分自身の足元を見直す活動に注目し「家族の大切さに気づく」



環境問題と福祉問題はつながっていた

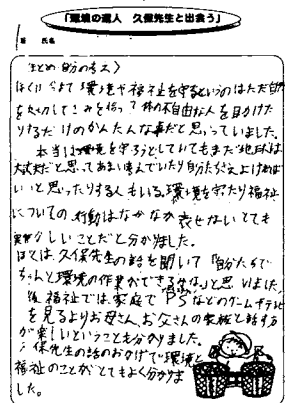


図3 久保さんとの交流後のふり返り
3 クラスなりのテーマを持ち交流し合う

＜6-1なりの役立つ活動プランを立てよう＞

①福祉グループ

- ・自分の足元からだんだんと外へ広がっていきよう
- ・福祉問題について、現状を調べよう

②環境グループ

- ・家で、教室で、現状を調べよう
- ・結果から、次の活動を考えよう
- ・みんなに呼びかけよう

つめることができた。相手（他者）の存在をとらえ直し、その立場から考えるということはどういうことなのか、をそれぞれが問い直していたことがその証左となろう。「見つめる力」を培う方法として、記述式の自己評価を用いた。その中で、毎回「役立つ」ということの意味を見つめ続けたことが、単元を見通す視点となり、環境や福祉に対する自分の視野、認識の幅を広げることにつながった。と同時に、そうして考えを深めている自分の姿を確認することにもなったと考える。また、こうした個々のふりかえりを全体に返す場の設定や、全体でまたグループ毎で意見交換を行う場の設定が、それぞれの考えや願いを共有し、深め合う「ネットワークする力」を培う場となっていたと考える。しかし、各グループの活動計画において、自分たちの行動がどう他者と関連していくのかが曖昧な部分もあり、他者とのつながりの具体的なイメージを持つことができる配慮、支援が必要であったと考える。

「見通す力」、「発働する力」については、この単元での実際に行動を計画し、実践する次単元でこそ発揮される力であろうと考える。ただ、これからの活動計画の概容を鑑みても、子どもがこの単元を通して、「役立つ」ことに対する認識を見直し、自分たち自身の足元に目を向け始めたことは、次単元を見通し、新たな「発働」の方向を示唆するものと言えよう。またこのことは、冒頭で示したような「役立つ」ということばに含意されがちな「他者に対するおごり」を子どもが無意識のうちに抱いているのではないかという懸念も、認識の上では払拭したことを示していると捉えられる。

しかし、現実実践の場において、子どもが今後それをどのように生かしていくのか、いかなる形で他者とのつながりを見出そうとしていくのかが問われるであろう。この単元での自己評価を活動の指針・基盤として、その都度確認する形で生かすようにしていきたい。

「ゴミ拾いだけでなく」という表現で、活動＝役立つという図式の安直さを指摘した。またB児は、「役立つ」ということを考える上で、現状把握、データなど、「原因を見つめ、答えを探す」という分析的な視点が必要であることに気づいている。また、A、D、E児は、切迫した現状を知ることによって、「なんとかよくしたい」「答えが見つかるといい」など、今後の自分たちが行う実践に対して、改めて更なる意欲を書き記した。F児は、これまでの自分の考えを自省した上で実践への慎重な態度を表していた。

以上のことから、子どもたちは、両ゲストとの交流から、自分なりに役立つことに対する認識を広げ、それを今後の実践への意欲につなげることができたといえる。したがって、荒木田さんや久保さんとの出会いを設定したことは、子どもの「役立つ」という認識を揺さぶり、一人一人がその意味を問い直して再構築する場として効果的であったといえよう。加えて、子どもの実践意識に対しても、大きな外的誘因を与える効果があったといえる。

③今後のプランを計画する

自分の掲げたテーマと方法について自分なりに自省できる
(自己客観的評価)

単元の実際の欄に記載したとおり、活動プランは、まだ完結したのではなく、具体性を欠いた脆弱なものである。しかし、各グループとも、単に自分たちがやりたい活動を、というのではなく、どういう活動が本当に必要なのか、現状や実態を調べ、問題点を見つけることから始めようと計画している。環境グループでは、自分・家→学級・学校→地域・社会へと実践の広がりを意識した話し合いが行われていた。今後、ゴミ拾い、施設訪問などが計画に盛り込まれたとしても、単元の最初に出されていたそれとは、子どもたちの意識においての位置づけ、意味合いが大きく異なるものであろうことは想像に難くない。

④単元を終えて

上述のように、子どもたちは役立つことの意味を自分なりに見